

基調報告 「“ 夢の砦 ” を築くには JADS , ALC と展覧会カタログ - 達成と課題」

水谷 長志

1. 『展覧会カタログ総覧』への前史
- JADS 関連事項
- ALC 関連事項
- 本稿と関わりの深い事例(刊行物及びシステム)
- 1976.6 東京都美術館、美術図書室開室
- 1989.4 アート・ドキュメンテーション研究会 [JADS]発足
- 1989.11 横浜美術館、美術図書室開室
- 1990.6 『新美術新聞』No.572「カタログは多くを語る：大阪でカタログコンクール開催」
- 1990.12 『現代の図書館』Vol.28, No.4「特集：アート・ドキュメンテーション」に「日本の展覧会カタログについての一考察」中島理壽
- 1991.3 『現代の眼(東京国立近代美術館ニュース)』No.436「特集：展覧会カタログ」伊藤真他
- 1992.1 『通信』No.12「展覧会カタログの整理：整理WGの活動から」整理WG
- 1991.1 『通信』No.11「展覧会カタログ収集に関するアンケートの結果報告」収集WG
- 1992.2 NDL『参考書誌研究』Vol.50「国立国会図書館所蔵 戦前期美術展覧会関係資料目録」石渡裕子
- 1992.3 『研究』No.1「展覧会カタログの情報管理」嘉数周子, 住広昭子, 田窪直規, 松井純子
- 1992.6 年次大会にて「展覧会カタログ情報誌の提案」種市正晴 於, 東京国立博物館資料館 JADS 収集WGの活動
- 1992.7 第11回研究会にて「展覧会カタログを考える」本江邦夫ほか 於, 日仏会館図書室(日仏美術学会と共催)
- 1995.3 東京都現代美術館、美術図書室開室
- 1996.11 アートカタログ・ライブラリー(財団法人 国際文化交流推進協会)公開
- 1999.5 横浜美術館、OPAC 公開
- 1999.11 第2回フォーラムにて「展覧会カタログの書誌情報 - その生成と流通に関する一試論」西村昭子・水谷長志 於, 国立西洋美術館
- 2000.3 『東京都現代美術館所蔵展覧会カタログ目録 1999年3月末現在』
- 2002.1 東京国立近代美術館、アートライブラリー開室
- 2002.3 国立西洋美術館、研究資料センター開室
- 2003.1 東京国立近代美術館、OPAC 公開
- 2003.3- 『日本の美術展覧会開催実績報告書』
- 2003.6 『展覧会カタログの愉しみ』今橋映子編著 東京大学出版会
- 2003.9 東京都現代美術館、OPAC 公開
- 2004.3 美術図書館横断検索 ALC 公開 JADS 野上記念推進賞
- 東近美、都現美、横浜美からスタート
- 2004.3 国立西洋美術館、OPAC 公開
- 2004.10 アート・カタログライブラリー閉館 蔵書は国立新美術館へ移管継承(約2万冊)
- 2005.3 国立西洋美術館、ALC 参加
- 2005.5 『美術カタログ論 記録・記憶・言説』島本浣著 三元社 JADS 野上記念学会賞
- 2006.3 『東京文化財研究所蔵書目録 6(上): 展覧会カタログ 目録編 1884-2004 開催分』
- 2006.6 NII「展覧会カタログに関する取扱い及び解説(平成18年6月15日版)」
http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/PUB/nl2/No18/f6_p1.html
- 2007.1 東京都写真美術館、ALC 公開に参加
- 2007.1 国立新美術館開館 アートライブラリー開室、ALC 参加
- 2007.4 NACSIS Webcat (NII) への ALC 横断検索に対応
- 2007.6 東京国立博物館、ALC 公開に参加
- 2007.6 東近美アートライブラリーのサイト「展覧会カタログに関する文献リスト[試稿]」2nd ed.
<http://www.momat.go.jp/art-library/art-library-guide/exhcatbiblio.html>
- 2007.7 江戸東京博物館、ALC 公開に参加
- 2009.1 『展覧会カタログ総覧』日外アソシエーツ + ALC7 館
2. 展覧会とそのカタログ 数の見直し
- 2.1 展覧会の数を把握する: 『展覧会カタログ総覧』
- 収録年代 1880 ~ 2007
- 収録書誌数 61,232(異なり展覧会数)
- 所蔵件数 113,250
- 監修およびデータ提供
- 東京国立近代美術館
- 横浜美術館
- 国立西洋美術館
- 東京都写真美術館
- 東京国立博物館
- 東京都江戸東京博物館

データ提供

国立新美術館

2.2 展覧会の数を把握する：『日本の美術展覧会開催実績報告書』ほか

『日本の美術展覧会開催実績報告書』

国際文化交流推進協会アートカタログ・ライブラリー編 東京：国際文化交流推進協会アートカタログ・ライブラリー，国立新美術館，2003；2004；2008. 中島理壽監修

1945-2000: 収録展覧会 21,747 件

2001-2003: 収録展覧会 3,067 件

2004-2005: 収録展覧会 2,311 件

「近現代美術展覧会開催情報検索」

東京文化財研究所（最終更新日 2008 年 12 月 9 日）

161,871 件

http://archives.tobunken.go.jp/internet/exkensaku.aspx

すべての展覧会でカタログが作られている訳ではない

『日本の美術展覧会開催実績報告書』1945-2000；2001-2003 のうち、何らかの印刷刊行物を伴ったと判断されたのは 15,392(約 62%)

『開催実績』が「主要な美術館かつ展覧会開催があったかどうか未詳の空白期間がほとんど少ない美術館」であっても

参考：

拙著「美術図書館横断検索 by ALC - その公開と課題」『アート・ドキュメンテーション研究』no.12, 2005. 3

2.3 展覧会カタログの書誌数(件数)を把握する

「展覧会カタログ検索」

東京文化財研究所（最終更新日 2008 年 11 月 4 日）26,724 件

http://archives.tobunken.go.jp/internet/cbkensaku.aspx

『東京文化財研究所蔵書目録 6(上): 展覧会カタログ目録編 1884-2004 開催分』

東京文化財研究所，2006. 3.

企画展一覧: 21,744 件

団体・連続展一覧: 4,122 件

『東京都現代美術館所蔵展覧会カタログ目録 1999 年 3 月末現在』

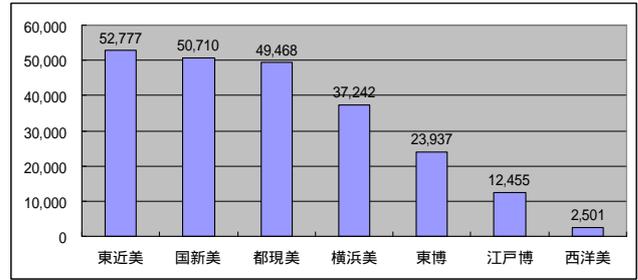
東京都現代美術館，2000. 3.

15,005 件

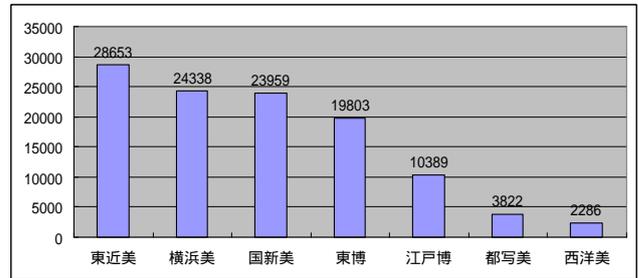
『展覧会カタログ総覧』日外アソシエーツ+ALC7 館

全 61,232 書誌

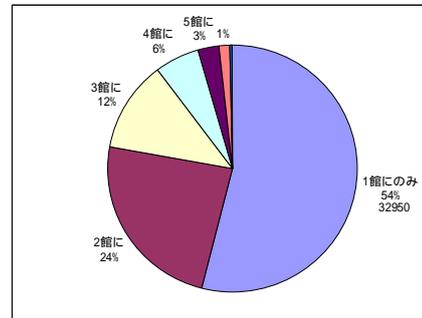
ALC における展覧会カタログ所蔵数 229,090 (2008.10.31 時点)



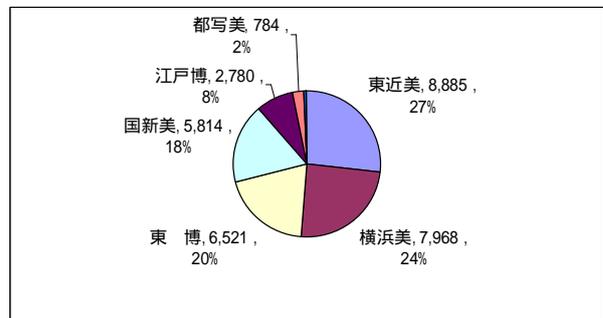
『展覧会カタログ総覧』61,232 書誌における各館件数(異なり書誌数)



『展覧会カタログ総覧』全 61,232 書誌とその所蔵先件数(何館に所蔵されているか)



『展覧会カタログ総覧』1 館にのみ所蔵 32,950 書誌の所蔵先



参考：

本稿末尾のグラフ【数の把握を試みる】

地方史研究協議会編『全国地域博物館図録総覧』岩田書院，2007.10, 476p. 7.105 件

4. アートライブラリ/アート・ドキュメンテーションから見た展覧会カタログに関わる情報群の質的課題

4.1 収録論文(記事)情報の検索可能性

例えば
東近美、新美、西美のカタログ掲載論文
図書館システム Limedio 電子図書館機能 目次入力
都現美 注記での悉皆的な記事情報入力
東京文化財研究所「美術関係文献検索（試験運用版）」
[http://archives.tobunken.go.jp/internet/
oakensaku.aspx](http://archives.tobunken.go.jp/internet/oakensaku.aspx)（最終更新日 2008 年 10 月 6 日 1966
～ 2004 年分 268,627 件）
4.2 テーマ(グループ)展出品作家情報の検索可能性

AL、SH での入力？
4.3 出品作品情報の検索可能性？
4.4 展評 - 出来事としての展覧会の記録
5. おわりに - 美術情報の 連携 構造を築くこと
試行中 国立美術館版「想 IMAGINE」
2009.1.19 公開済み
国立国会図書館 PORTA
<http://porta.ndl.go.jp/portal/dt>

『展覧会カタログ総覧』序文「夢の砦 - 展覧会カタログのために」

かつて展覧会カタログのための専門図書館、アートカタログ・ライブラリー(財団法人国際文化交流推進協会)が赤坂にあって、残念ながら 2004 年 10 月末日をもって閉館しましたが、そのカタログを移管継承した国立新美術館が設立準備室だった頃、同室のニュース誌に「夢の砦 - アートライブラリ 展覧会カタログのために」¹⁾と題し、次の一節を書いたことがあります。

人々が行き交うように、作品も、いま、静かに安全に細心に、運ばれていきます。
美術館から美術館へ、個人のお宅から美術館へ、道路を、空路を、山を越え、海を渡り。
そして、展覧会は開かれて、閉幕とともに、ふたたび、静かに、もとの安息の地へ帰ります。
展覧会は、このように作品が集まり、また、散りゆく、^{ひととき}一刻の夢の場です。わくわくしませんか。
そして、夢の^{おもかげ}面影は、観る人の心のうちとカタログ(図録)に残ります。
私たちは、アートライブラリ(美術図書室)を作ります。
そこにある^{いちご}主役は、一期の夢をよみがえらせる、展覧会のカタログです。

この総覧に参加した美術館、博物館の図書室は、いずれも展覧会を開き、カタログを作る館の中にあつて、館の活動を記録する資料であり、かつ館の活動、特に調査研究を支える資料としての展覧会カタログを収集保管し、一般への公開と提供も行なっています。各館は個々に蔵書の検索システムをインターネットに設けるとともに、8 館 10 室の蔵書を横断的に検索するシステム(<http://alc.opac.jp>)にも参加しています²⁾。本総覧の刊行もまた、この美術図書館横断検索を維持する美術図書館連絡会(ALC: Art Libraries' Consortium)の存在があつてはじめて可能になりました。

これまで「隠れたベストセラー」と言われながらも、書店では買えない「本であつて本でない」不思議な存在の展覧会カタログ³⁾。展覧会が終われば「残るのは“カタログ”」⁴⁾であるように、展覧会という^{ほかな}儚き夢をよみがえらせる、カタログの砦、「夢の砦」⁵⁾であるような専門図書館が、「ミュージアムの中のライブラリ」として存在していることを、この総覧の刊行を機に、展覧会カタログの魅力とあわせて、広く多くの方々に知っていただけることを願っています。

1) [無署名] 『国立新美術館設立]準備室ニュース』No.2, 2005.3, p. [5].

2) ALC は 2004 年 3 月、東京国立近代美術館、東京都現代美術館、横浜美術館の 3 館でスタート。以後、本総覧参加の国立西洋美術館、東京都写真美術館、国立新美術館、東京国立博物館、東京都江戸東京博物館が加入、2007 年 7 月、全体で 8 館となり、同年 4 月には NACSIS Webcat (NII) への横断検索も可能にしている。東京国立近代美術館は美術館のアートライブラリ、工芸館の図書閲覧室、フィルムセンターの図書室の 3 室。ALC は 2007 年度第 1 回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会推進賞を受賞。システムの詳細は同学会発行『アート・ドキュメンテーション研究』(no.12, 2005.3)掲載の拙文「美術図書館横断検索 by ALC - その公開と課題」を参照されたい。なお、本総覧への東京都現代美術館の参加はないが、同館美術図書室による『東京都現代美術館所蔵展覧会カタログ目録 本文編/索引編』(同館, 2000-2001)がある。

3) その不思議さと魅力は、例えば、今橋映子編著『展覧会カタログの愉しみ』(東京大学出版会, 2003.6)などを参照されたい。種市正晴編「展覧会カタログに関する主要日本語文献一覧」『アートカタログ・ライブラリー・ニュース』1 号 (1996.11, <http://www.acejapan.or.jp/acl/ln01-07.html>にて閲読可)も貴重。

4) 高階秀爾「新美術時評 残るのは“カタログ”」『新美術新聞』No.623, 1991.12, p.7.

5) 小林信彦氏の小説題名(新潮社, 1983)よりお借りしました。

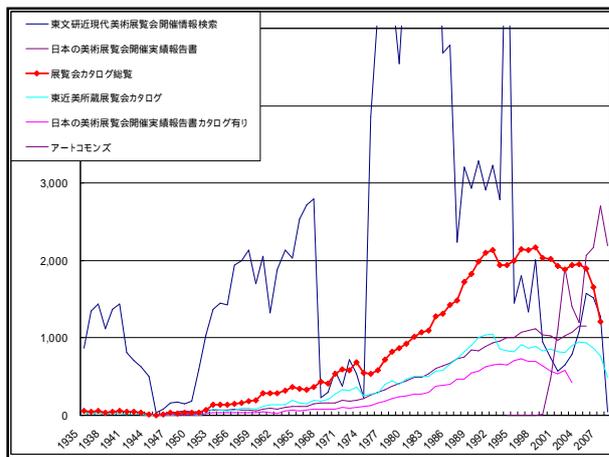
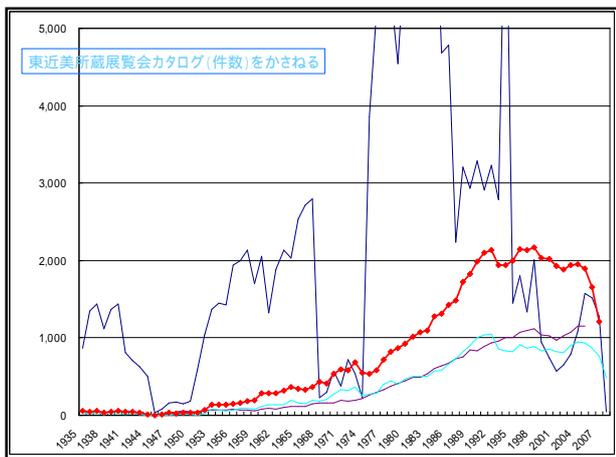
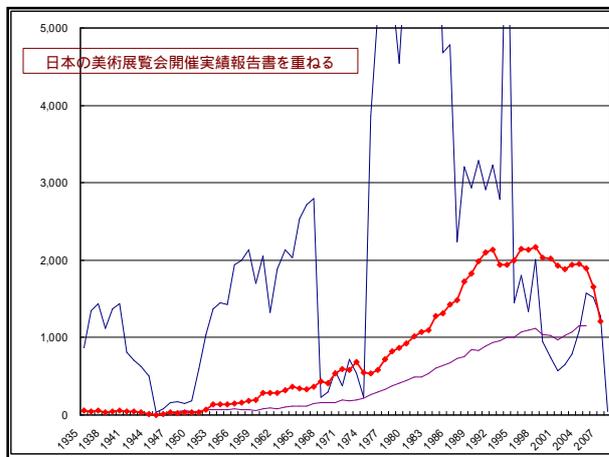
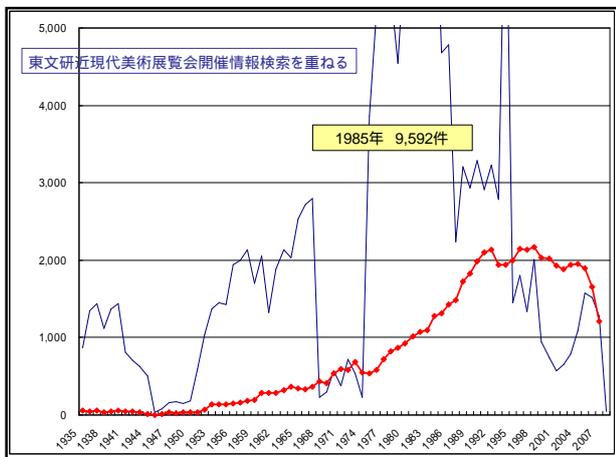
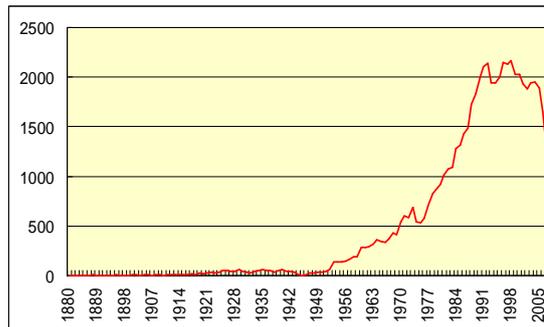
【数の把握を試みる】

展覧会とカタログ
の数の把握を試みる

【ソース】

- 東文研近現代美術展覧会開催情報検索
- 日本の美術展覧会開催実績報告書
- 展覧会カタログ総覧
- 東近美所蔵展覧会カタログ
- 日本の美術展覧会開催実績報告書カタログ有り
- アートcommons

『展覧会カタログ総覧』全61232書誌
1885-2007 年別刊行件数



展覧会カタログと現代美術

松本 透

展覧会カタログに求められるのはふつう記録性、学術性、デザイン性（それは商業性とも結びつく）などであろう。美術館黎明期（1950年代）のカタログは小冊子程度のものが多かったが、テキストや図版がない場合でも出品作品リストだけは付いていた。記録性（文字と図版による）は、カタログという出版物に特有の不可欠要素なわけである。また展覧会カタログは、長いあいだ正方形に近い版型やまばらな活字組みなどの定型から脱することがなく、デザイン面の質の向上はむしろ立ち遅れたが、その一因として、美術館のいわば独占販売物であるカタログには競争相手がいない、といった事情があったかと思われる。展覧会のおまけのように思われがちなかたログに学術性が求められるようになったのはさらに遅い。それは、だいたい1970年代末頃からであろう。

以上の要件は、現代美術展のカタログにそっくりそのまま当てはまるわけではない。まず記録性。出品作品の文字データはともかくとして、近年の美術の趨勢であるインスタレーションやビデオ・インスタレーション（とりわけその新作）の記録を図版のかたちで収録しようにも、カタログにできることは限られている。出版を遅らせる、展示風景のフォト・ドキュメントを別冊で作る、ビデオ映像のディスクを付録でつけるといった、いずれも一長一短のある間に合わせの手立てがあるばかりだ。記録性を徹底させようとする、往々にして展覧会に合わせて出版されるべきカタログという枠組みや、書籍としての枠組みと衝突したり、それを破ったりせざるをえないのである。学術性について。現代美術展の開催やカタログ制作においても、学術的関心・調査研究・方法（資料批判など）等がベースとなるのが望ましいが、とはいえ現代美術の調査研究はおおむねフィールド・ワークの段階を出ないであろうし、また、高度な学術性がただちに現代美術展に求められる批評性に繋がるわけではない。批評性の問題は本発表の枠をはるかに越えるからここで詳しくはふれないが。ではデザイン性はどうか。デザインの良し悪しはあくまでも内容との関係に即してはかられるべきであることを考えると、作家がコンセプトの、あるいはスタイルの個性を競い合う現代美術展（とりわけ個展）のカタログにおいて、デザイン的にも思い切った試みがなされるのは当然であり、これについてはめざましい例を、あとでいくつかお見せしたい。

さて、以上略述したことからもたぶん察していただけるように、現代美術のなかには、

展覧会カタログという器、あるいは書物という器に収まりきれないさまざまな要因が潜んでいる。いくつか顕著な例をひろいながら、展覧会カタログと現代美術の共犯、離反の諸相を見ていきたい。

略歴

松本 透(まつもと とおる)

1955年東京生まれ。1980年京都大学文学研究科大学院修士課程修了(美術美術史学専攻)。同年より東京国立近代美術館に勤務。担当した展覧会として「現代美術における写真」展(1985年)、「カンディンスキー展」(1987年)、村岡三郎展(1997年)、草間弥生展(2003年)、「アジアのキュビズム」展(2005年)など。共著書に『芸術の理論と歴史』(思文閣、1990年)、編著書に『日本近現代美術史事典』(東京書籍、2007年)、訳著書にS.リングボム『カンディンスキー - 抽象絵画と神秘思想』(平凡社、1995年)などがある。

『日本美術年鑑』と展覧会カタログ

田中 淳

東京文化財研究所から、毎年一冊刊行される『日本美術年鑑』の巻頭の序文は、もとより所長名によるものですが、ここ 10 年ほどは、わたしが原文を書いて、所長に上げ、所長自身による赤字が入って決定稿となり、入稿されています。今年度のわたしの文案は下記のようなものでした。

序

『日本美術年鑑』は、わが国美術界の一年間の動向を、基本となる資料を収集整理してまとめたもので、昭和 11 (1936) 年に当研究所美術部 (平成 19 年 4 月 1 日付で企画情報部に統合) の前身である帝国美術院附属美術研究所によって第一冊が刊行されました。この出版事業は、昭和 27 (1952) 年に美術研究所が東京国立文化財研究所になり、さらに平成 13 (2001) 年 4 月、独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所と改められ、つづいて平成 19 (2007) 年 4 月には独立行政法人国立博物館と統合し、新たに独立行政法人国立文化財機構が設置されても変わることなく受けつがれています。今回は、その第 64 冊目となります。

この平成 19 年版は、平成 18 年 (2006 年 1 月～12 月) における美術界の動向を、年史・展覧会・文献目録・物故者の四項目に分けて編集しています。これらの記述の方法は、創刊以来の基本的方針を継承していますが、美術界の活動が多様化し、博物館・美術館が増加した今日にあっては、各項目とも調査・採録すべき事項が急増しているため、各項目の内容は厳選せざるを得ないのが現状です。そのため、平成 14 年には、情報の一層の精選をすすめるとともに、分類と内容を再精査して一部構成を改めましたが、今回も、それを継承しました。

ところで、昨年後半から起こった世界を覆う経済的な不況のなか、過剰なグローバルゼーションへの反省から、それぞれの国、地域の固有の伝統文化を見直そうとする動きがはじまっています。もとよりわが国の場合は、幸いにも世界に誇るべき文化財、及び美術作品が、膨大に保存され、また日々研究が深められつつあります。その文化財研究の基礎資料のひとつが、本年鑑であるといえます。文化財に関わる過去と現在と未来をつなぐ資料としての本年鑑の価値は、まさにこの点にあり、今後ともますます活用されることを望ん

でいます。

なお、この年鑑の編集には、企画情報部近・現代視覚芸術研究室と同部文化形成研究室とが当たり、同部文化財アーカイブズ研究室の協力を得ました。資料を提供して下さった多くの方々、国公私立の美術館・博物館、大学等の研究教育機関、美術団体、画廊等の美術関係諸機関に対し、心からお礼申し上げます。

いかにも紋切り型のようなのですが、ここでは、継続的に刊行している組織自体の変遷、また情報を集め、編集してまとめていくにあたっての内容の変化にふれ、さらに僭越ながら必ずその年を総括するような一節をいれるように心がけています。今回の発表では、わたしがこの編集にたずさわることになってからの14年間、その間の『日本美術年鑑』の内容の変化について発表します。とりわけこのシンポジウムのテーマとなっている「展覧会カタログ」が、どのようにこの年鑑のなかであつかわれてきたかを中心に発表します。

もとより『日本美術年鑑』は、基本的に美術、文化財に関する文献情報の集成です。当該年に刊行された定期刊行物の文献情報を中心に分類編集し掲載するのですが、「展覧会カタログ」に掲載された論文等のテキストが、文献情報として「定期刊行物」とは別に、「美術展覧会図録所載文献」として独立して扱われるようになったのが、平成12年版(2000)からのことです。ではそれまでは、「展覧会カタログ」の情報は、どのように年鑑のなかであつかわれてきたのか、またその後から現在まで、「美術展覧会図録所載文献」の項では、どのような問題が生じているかを報告します。

略歴：

田中 淳(たなか あつし)

1955年 東京生まれ

1983年 東京芸術大学大学院修士課程修了

同年 東京国立近代美術館に勤務

1994年 東京国立文化財研究所に異動

現在 国立文化財機構 東京文化財研究所企画情報部長

美術家書誌と展覧会カタログ、そして展覧会図録

中島 理壽

1. 展覧会カタログにおける美術家書誌

(1) 『美術家書誌の書誌』(勉誠出版 2007年12月刊行) を編んで

- ・本書は、日本語による「美術書誌の書誌」のうちの 人物書誌編 として編纂
- ・副題に「雪舟から東芋、ヴァン・エイクからイ・ブルまで」とあるように、古今東西の美術作家と美術関係者を対象としている(約2600名)
- ・美術家書誌を収録している刊行物
作品集、美術全集、研究書・著作集・評伝、美術雑誌特集号、展覧会カタログ
その中でも「展覧会カタログ」が3分2を超え、全刊行物のうち「展覧会カタログ」が占める割合はさらに年を追うごとに高まりをみせている。

(2) 展覧会カタログは美術家書誌の宝庫

- ・日本では年々、主として美術館学芸員によって、展覧会の数だけの美術家書誌が編まれ、他の芸術分野、人文科学では考えられない現象が展開されている。
- ・高い評価が与えられる反面、その背景には(美術館の学芸活動が研究調査活動とするならば)看過できない問題点をはらんでいる。他の芸術分野では考えられない ということは一つの美術家書誌を編むには相当数の年月が必要となり、そう簡単に量産はできないわけで、そこには安易な編纂が横行していることになる。参考にした、と記して先行の既存の書誌を再使用しつつ新たに編纂したかのように繕う美術家書誌が展覧会カタログに収載されているのである。

2. 美術家書誌における展覧会カタログの位置づけ

(1) 重視と羅列

- ・作家研究における展覧会カタログの役割を認識しているかどうかで、記載の濃淡が生じ、出版事項とともに「論考+カタログ+資料編」を記載する形と「展名+発行所+発行年+開催美術館名」という出版事項にとどめる形がある。
- ・展覧会カタログを重点的に取り上げた美術家書誌がみられるようになってきた。

(2) 冒頭か、末尾か

- ・個々の書誌における展覧会カタログを収める位置が、冒頭に置かれる形と末尾に

置く形がある。

- (3) 消される美術家書誌 展
・「年譜」もそうだが、展覧会カタログに収載 2009年3月
された「文献目録」を目録上から消す場合が 論()
多い。 カタログ(編)
(4) 様々な呼称 (小見出し) 文献目録(編)
・展覧会カタログ、展覧会図録、展覧会目録、個展カタログ

3. あなたは「展覧会カタログ」派？ それとも「展覧会図録派」？ あらためて展覧会カタログを見直す

(1) 揺れ動く呼称 (用語)

本シンポジウムの参考文献として挙げられている荒谷宏美さんの「展示会カタログの収集と提供」でも、次の用語が使われている。

展示会カタログ、展覧会図録、展覧会リーフレット、展覧会カタログ、

(2) 様々な表情をみせる展覧会カタログ

作り手、使い手、扱い手などによって、それぞれの個人の思い入れによって、世代によって、様々な呼称が用いられる。ということは、どこ(内容、機能、形状など)を重視するかによって呼称が異なることが分かる。

(3) 歴史的にみると

- ・展覧会カタログが未成熟の時代、戦前は「展覧会図録」が主流であり、「図書」と「図録」のはっきりした区分はなかった。

例：『第1回淡交会図録』(1924年11月) = 東近美や東文研では「図書」として、都現美や横浜美術館では「展覧会カタログ」として扱っている。

- ・企画展カタログ 戦後、欧米の展覧会カタログ事情の理解が進むにしたがって、学芸力と経済力の向上とともに、「企画展カタログ」が大きくクローズアップされ、展覧会カタログ = 企画展カタログという構図が確立する。
- ・企画展カタログの三要素
展覧会カタログの基本形は、「カタログ」を核にして、冒頭の「論考編」と巻末の「資料編」とで構成される。
- ・ただ、「企画展カタログだけでは年譜は編むことはできない」という現実があり、そ

の展覧会が「新作展」か「旧作展」か、というもう一つの理解、認識が求められる。

(4) もう一つの展覧会カタログ群 = 新作展カタログ

- ・新作展カタログ = 作品図版そのものが最大の情報。「展覧会図録」と呼称されてきた。
 - ・旧作展カタログ = 企画展カタログの大部分がこれに該当し、小冊子と呼ばれていた時代の展覧会カタログにとって代わって、作品情報(いわゆる「カタログ」という根幹)の充実が図られた本格的な「展覧会カタログ」時代が生まれることになる。
 - ・新作展カタログ
 - a 個展カタログ、グループ展カタログ(展覧会リーフレット)
 - b 画廊企画展カタログ(戦前は必ずと言ってよいほど「新作画展」とされた)
 - c 美術家団体定期展(公募展)カタログ
 - ・展覧会カタログ
 - A 企画展カタログ(今橋映子編『展覧会カタログの愉しみ』によって市民権獲得)
 - B 新作展カタログ(歴史的には「展覧会図録」「展覧会目録」から成る)
- この「新作展カタログ」の収集と充実が、美術館図書室の次なる課題となっている。

略歴

中島理壽(なかじま まさとし)

1944年東京生まれ。法政大学文学部日本文学科卒業、70年都立日比谷図書館(都立中央図書館)司書となり、75年東京都美術館に異動、日本で最初の本格的な公開美術館図書室の開室準備・運営にあたる。86年美術ドキュメンタリストとして独立、美術資料を基にした表現活動(書誌、年譜、年表、年史の編纂など)を展開。この間、多摩美術大学芸術学科非常勤講師、国立新美術館客員研究員をつとめ、2008年第2回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会推進賞を受賞。主な編纂書に『近世人名録集成』全5巻(1976-78年)、『近代画家研究資料 佐伯祐三』全3巻(79-80年)、『美術新報総目録』(85年)、『昭和・物故の美術家たち』(90年)、「日本の美術展覧会開催実績報告書 1945-2000」(2003年)、「同 2001-03」(04年)、「同 2004-05」(08年)、『美術家書誌の書誌』(07年)がある。

展覧会カタログと大学（院）の美術教育

今橋 映子

- 1 はじめに
- 2 東京大学教養学部・駒場博物館資料室について
雑誌/院生委員会/図書館/資料室 の連携
- 3 比較芸術の二概念 クロスエリア・クロスジャンル
- 4 展覧会企画の現代と学際研究との関係
- 5 あるゼミナールのシラバス
第1-2回 展覧会カタログの読み方
第3回 「千代紙色々」展カタログを使って
第4回 資料室探索と「私の一冊」
第5回 「私の一冊」3分間発表
第6回 カタログ制作の現場（ビデオ等）
第7-13回 比較芸術論の理論とカタログ
博物館という制度/他者理解と展示/日本近代文化と西欧
アジア世界と日本/テキストと映像（書物、詩人=画家 等）
芸術家たちのコラボレーション など
- 6 批評の場所へ

【参考文献】

雑誌『比較文学研究』東大比較文学会、現在刊行中（年2回）（展覧会カタログ評を、連載中）

今橋映子編著『展覧会カタログの愉しみ』東京大学出版会、2003年

今橋映子「クロス・ジャンル研究の現在 比較芸術論の新たな地平」（『比較文学研究』第74号、
1999年8月）

『明治・大正・昭和初期 千代紙いろいろ：小間紙の世界展』カタログ 旧新橋停車場鉄道歴史展示
室（監修：大柳久栄）2007年4月

【雑誌『比較文学研究』所載 展覧会&カタログ評 最近の一覧】

第92号 特輯 横光利一 2008年12月

佐藤 光「青山二郎の眼」展

李 建志「文化的記憶 柳宗悦が発見した朝鮮と日本」展

第91号 特輯 戦後日本文学

前島志保「アジアのキュビズム」ソウル展

深見 麻「大正シック」展

第90号 特輯 雑誌メディアにおける視覚文化

伊藤由紀「森鷗外と美術」展

安藤智子「イメージの迷宮に棲む 柄澤齊」展

佐藤 温「近代文人のいとなみ」展

第89号 特輯 異文化接触と宗教文学

今野喜和人「詩人の眼・大岡信コレクション」展

手島崇裕「マンダラ展 チベット・ネパールの仏たち」

第87号 特輯 中東世界

坂本輝世「アラビアンナイト大博覧会」展

西川正也「ジャン・コクトー展 サヴァリン・ワンダーマン・コレクション」

前島志保「アジアのキュビズム 境界なき対話」展

略歴

今橋映子(いまはし えいこ)

1961年東京生まれ。

1984年学習院大学フランス文学科卒業。87年東京大学大学院比較文学・比較文化専攻修士課程修了。89

90年パリ第4大学大学院留学。博士論文提出資格(DEA)取得。92年東京大学大学院博士課程修了、
学術博士。

筑波大学文芸・言語学系専任講師を経て、98年より東京大学大学院総合文化研究科助教授、現在 同大
学准教授。専門は比較文学・比較文化。

主著：

- 1 『異都憧憬 日本人のパリ』(柏書房、1993年/平凡社ライブラリー、2001年)
- 2 『パリ・貧困と街路の詩学 1930年代外国人芸術家たち』(都市出版、1998年)
- 3 『<パリ写真>の世紀』(白水社、2003年)
- 4 『ブラッサイ パリの越境者』(白水社、2007年)
- 5 『フォトリテラシー - 報道写真と読む倫理』(中公新書、2008年)
- 6 編著『展覧会カタログの愉しみ』(東京大学出版会、2003年)
- 7 共編著『1900年パリ・日本人留学生の交遊 - 『パンテオン会雑誌』資料と研究』(ブリュッケ、2004年)

和光大学のカタログ・コレクションについて

三上 豊

1. カタログの収集のはじまり。

あまり美術書がそろってなかったという現実があった。そこで学生に見合った棚揃えと図書館の開架スペースをどうみるかを検討。予算で高額な美術書は十分に買えない。またスペースをとる美術書は敬遠される。着任当時、意外とこちらの希望が館に伝わりやすく、図書館コードにある程度抵触してもいいという判断をいただいた。一人の作家でも、絵画と彫刻は別の棚になるなどは図書館コードを優先した。棚は別でも検索機能「さとる君」では一覧できる。最初は背表紙がある美術館のカタログをメインに考えた。書籍より安く、情報が新しいという利点がある。01年から美術館のカタログおよび束があるもの、04年から本格的に画廊のカタログを入れていった。

一方、大学図書館をどう特色づけるかの課題があがっていた。そういった図書館の改革に乗ったことが大きい。

2. 4人の蔵書の寄贈。

『美術手帖』元編集長の田中氏、彫刻の写真家で有名な野堀氏、美術ライターの池上氏、そして三上の蔵書。それぞれが持っていた本やカタログは少しずつ違う傾向であることがあり、それを寄贈した。

3. 歩いて集めること。地方へ手をのばすこと。

現在でも、基本的には歩いて画廊のものは集めている。一方、購入予算からは地方の美術館に連絡をとり、カタログの在庫リストを取り寄せ選書を行ない、購入または場合によっては寄贈もあり、蔵書を増やしている。関東圏はのぞき、北からはじめて、現在は大阪府まできている。これを繰り返してゆくことで充実をはかる。

4. MOMAのカタログを購入。

2008年に、文科省の私立大等研究設備整備費等補助金で、MOMAのカタログを約300タイトル購入できた。MOMAのものはなるべく揃えていくことを進めている。ただ、海外のカタログよりも本学の特色としては、国内の画廊規模のカタログ収集をやっている

きたい。

なお、棚への配架は 09 年 3 月から変えた。ケースに入れてもとなりの本の重みに耐えられない。ならば作家別に配架していたのを会場別（画廊別）にし、まとめてみることにした。背表紙のあるカタログはこのかぎりではなく、現状のままでいく。この 3 月に変更したばかりなので、まだ使い勝手はまだわからない。

また、3 月から国立情報学研究所も NACSIS-Webcat から検索できるようにした。

略歴

三上豊(みかみ ゆたか)

1951 年東京生まれ。和光大学人文学部芸術学科卒。映画業界での仕事を経て、美術出版社『美術手帖』編集部で 11 年間勤務後、フリーのエディターとして過ごす。スカイドアの美術書、季刊美術雑誌『CAR』の編集を担当。小学館で『世界美術大全集西洋篇』、『日本美術館』、『西洋美術館』、『週刊美術館』などの編集に関わる。一方、画廊史のドキュメンテーションを手掛け『資生堂ギャラリー75 年史』の編集に参加。並行して貸画廊の記録集を作成、これまでに『ときわ画廊 1964-1998』、『秋山画廊 1963-1970』、『日辰画廊 1979-2002』、『靱ギャラリー 1978-1985』を制作発行している。08 年は『キース・ヘリング / ぼくが信じるアート。ぼくが生きたライフ』(中村キース・ヘリング美術館)、「横浜トリエンナーレ 2008」のガイドブック、カタログの編集などに携わった。2000 年和光大学表現学部芸術学科に着任、現在に至る。